

W. D. Howells の “The Rise of Silas Lapham” について

各 務 鋭 三

I

ウィリアム・ディーン・ハウエルズを論ずることは、アメリカン・リアリズムを語ることであり、ロバート・E・スピラーの云う⁽¹⁾、第二のサイクルの出発点を語ることに等しい。

アメリカン・リアリズムへの道を準備した人として、ハウエルズのほかに、マーク・トウェインと、ヘンリー・ジェイムズがある。Booth Tarkington は、この華々しい巨大な群像をみて、“a noble triumvirate” と讃えた⁽²⁾。

しかし今、アメリカン・リアリズムという旗印のもとに、ハウエルズとマーク・トウェインと、ヘンリー・ジェイムズの文学を、等質化しようとするとき、われわれは、ひどい困惑のなかに落込まざるをえない。何故なら、ハウエルズのリアリズムを、東部的とすれば、マーク・トウェインのリアリズムは、西部的であり、ヘンリー・ジェイムズのリアリズムは、多分にヨーロッパ的であるからである。このように、アメリカン・リアリズムの出発の地点において、リアリズムという統一的用語は、實際上、あいまいさと多様さを含んだ用語であった。

今日、マーク・トウェインや、ヘンリー・ジェイムズと比較して、ハウエルズは、アメリカ文学史のなかで不遇である。この小論において、私は、作品「The Rise of Silas Lapham」を考察し、そこからハウエルズのリアリズムの实体と、彼の不遇とを検証してみたい。

II

印刷屋兼新聞発行者を父として、ハウエルズは、1837年、オハイオ州の田舎に生まれた。既に少年時代から、文学への関心を持ち、1857年、オハイオ州の首都 Columbus に移って、新聞雑誌に記事を書くようになる。やがて、Lincoln の選挙宣伝用の伝記を書いて認められ、Venice の領事として、1861年から4年間イタリアに滞在。1866年、Atlantic Monthly の副主筆としてボストンに住み、1871年から1881年まで、その主筆として在任。ボストンの時代から、ハウエルズの作家活動が始まる。作品「The Rise of Silas Lapham」が出た1885年は、ハウエルズにとって、重要なターニング・ポイントにあっていた。第一に、それはボストンからニューヨークへの移動のときであり、第二に、作風の変化のあらわれるときであった。それ以後は、ニューヨークに居住、Harper's Magazine 誌上に、リアリズム小説擁護のための評論を連載した。

作品「The Rise of Silas Lapham」は、初期の作品群、即ち「Their Wedding Journey」(1872)、「A Foregone Conclusion」(1875)、「The Lady of Aroostock」(1879)と、社会的関心を示す後期の作品群、即ち「Annie Kilburn」(1889)、「A Hazard of New Fortune」(1890)、「A Traveler from Altruria」(1894)、「Through the Eye of the Needle」(1907)、との間に、位置を占めている。前者は、ハウエルズのリアリズムが、十分に自覚的段階に達していなくて、旅行記や、やや喜劇的傾向を伴う作品が多く、後者は、トルストイや、ヘンリー・ジョージや、マルクスや、ラスキンの思想に近づき、ハウエルズの創作活動においても、社会的関心が示されてくるときの作品である。しかしこの後者の時期においては、ハウエルズの活動のエネルギーは、文学的方向よりも社会的方向によく示され、また創作活動よりも、評論的編輯的活動に、つよくあらわれている。

その上、作品「The Rise of Silas Lapham」が出た前後には、比較的すぐれた作品、「A Modern Instance」(1882)と、「Indian Summer」(1886)が

書かれている。

以上の事情からみて、1885年前後は、ハウエルズの純文学的活動の最盛期であったと考えられる。それ故、この時期に書かれた作品、「The Rise of Silas Lapham」を検討することは、ハウエルズのリアリズム文学へのアプローチにとって、絶好の近道であると考えられる。これが、この作品を取り上げ、考察するに至った理由である。

III

... what is unpretentious and what is true is always beautiful and good, and nothing else is so.⁽⁴⁾

これは、ハウエルズの、リアリズム小説論の集大成といってよい「Criticism and Fiction」(1891)からの引用である。これは、美は真であるという論理でなく、真は美であるという、ハウエルズのリアリズムの核心を突いた言葉である。

1870年の最初のスケッチ以来、ハウエルズの一貫したモチーフについて、Everett Carter は、“opposition to the sentimental view of life”を挙げ⁽⁴⁾、さらにつぎのようにいっている。

But often Howells' anti-sentimentalism was much more than just a passing comment.⁽⁵⁾

たしかにハウエルズにとって、リアリズムの反対概念は、カーターのいうセンチメンタリズムであるが、さらにそれは、ローマン主義であり、スコット流のロマンスであった。

それ故ハウエルズは、「Criticism and Fiction」のなかで、批評の任務として、つぎのような反ローマン主義的主張を展開させた。

In criticism it is his business to break the images of false gods and misshapen heroes, to take away the poor silly toys that many grown people would still like to play with.⁽⁶⁾

以上みてきたように、ハウエルズのリアリズムの中心概念は、“truthfulness”

であり、その対立概念は、“falseness”であった。

つぎに、ハウエルズのリアリズムが要求する方法論をみてみよう。再び、「Criticism and Fiction」から引用したい。

Realism is nothing more and nothing else than the truthful treatment of material....⁽⁷⁾

これは、題材の忠実な取扱いを目指すリアリズムであり、“to be true to life”ということである。絵空事に陥るローマン的誇張を嫌ったハウエルズは、“truthful treatment”という方法上の態度を示したが、しかし依然として、事実と虚構との問題が、未解決のまま残ることを否定しえない。

第三に、ハウエルズのリアリズム観がみちびく、題材の問題をみてみよう。今、Hamlin Garland の、つぎの言葉を聞こう。

Howells intends to treat of the average, the commonplace, to celebrate the normal men and women of America. He aims to being true to his time and place. Like Whitman he has no need of themes of feudalism.

In his quiet way he is quite as revolutionary. His realism is not that of the French. Zola is not a realist as Howells uses the term, for the reason that he treats, not of the average but of the abnormally criminal classes.⁽⁸⁾

このガーランドの言葉は、ハウエルズが取扱う素材の範囲を、適確に指摘している。ハウエルズが描く題材の傾向は、結局のところ、異常なものより平凡なものを、非日常的なものより日常的なものを、超現実的なものより現実的なものを、インターナショナルなものよりアメリカ的なものを、抽象的なものより具体的なものに限られる。それ故「罪と罰」に示されるような、ドストイエフスキー的な深刻な悲劇的テーマは、ハウエルズにとって、もっともアメリカ的なものでないと考えられた。そしてハウエルズが描こうとした対象は、いわゆる“smiling aspects of life”⁽⁹⁾であった。ここにわれわれは、ハウエルズのオブティミズムを認めざるをえないだろう。しかしこのように、平凡な普通人の物語を、庶民のために書くというハウエルズのリアリズム観をささえているも

のは、デモクラシーの精神に通ずるといってよいだろう。

Donald Pizer は、ハウエルズはデモクラシーと文学との関係をあとづけようとしたのだと述べているが⁽¹⁰⁾、このことは、ハウエルズのリアリズムの精神にふれたものと考えられる。

IV

作品「The Rise of Silas Lapham」は、27章に分れている。Corey 家と Lapham 家とは、George C. Carrington, Jr. の言葉をかりれば、“Brahmins and nouveaux riches”⁽¹¹⁾ として、作品のなかで、常に対比的に描かれる。ラバム家の構成メンバーは、作品の主人公とみられるサイラス・ラバム、妻 Persis, 娘 Penelope, 妹娘 Irene である。一方サイラス・ラバムから、“symbol of splendour”⁽¹²⁾ と思われているコーリー家の構成メンバーは、Bromfield, 妻 Anna, 息子 Tom, 娘の Lily と Nancy である。その他に重要な人物として、サイラス・ラバムの仕事をめぐって Rogers, ハウエルズのスポーツマン的人物として、Sewell があらわれる。

サイラス・ラバムは、ニュー・イングランドの農夫である父親が、四十年前に発見したペンキの原坑から、ひと財産を築きあげた人物である。彼は平凡なひとりのアメリカの成功者であり、Booth Tarkington の云う、“a type of American business man”⁽¹³⁾ そのものである。

第一章の冒頭、‘Solid Men of Boston’ シリーズの記事のためにやってきた新聞記者とのインタビューにおいて、ボストンにペンキ工場をつくるほどにまで成功したひとりの名士として、サイラス・ラバムは登場する。

サイラスは、仕事の共同者であったロジャーズの持株を買い取って、その仕事の唯一の所有者におさまる。しかし一家の“conscience”⁽¹⁴⁾ であろうとした妻は、現在の富が、道徳的にみて汚れたものであると思っている。のちに至って、サイラスが経済的苦境に陥ったとき、ロジャーズから一つの提案、即ち価値のなくなった西部の地所を、イギリス人に売りつけるという提案をうけ、サイ

ラスはこれに誘惑を感じずが、拒否してしまう。このときロジャーズは、これは普通の商道になんかっているといってすすめるが、サイラスはその言葉を退ける。さらに、ビジネスの不振にもとづく現在の経済的苦況から立ち直る方便として、ロジャーズに売ることも、塗料会社への投資を望んでいる無智なニューヨーク人を利用するという、安易な道をもえらばなかった。その結果、経済的破綻を一身にひきうけて、サイラスはヴァーモントの農園に引退する。この間に、サイラスの物質的世俗的繁栄を示す新築の家が火事で焼失するという、シンボリックな場面⁽¹⁵⁾ があらわれる。

一方コーリー家のプロムフィールドは、ディレクターで素人画家であり、彼は金銭上のことには無関心で、悠々自適の生活を送るブラーミンである。コーリー家とラバム家との関係は、カナダの行楽地で、ラバム夫人が、コーリー夫人を手厚く看護したことから始まる。コーリー家の息子のトムは、現在の生活にあきあきして、ラバムの仕事に参加し、やがてビジネスマンとしての才能を示すに至る。

またラバム家の下の娘アイリーンは、しばしば訪れるトム・コーリー青年を、愛するようになる。皆もこのことを、暗黙の裡に諒解している。しかし予想に反して、トムが上の娘ベネロピにプロポーズしたので⁽¹⁶⁾、皆びっくりする。特にひどいショックを受けたベネロピは、第一に、妹アイリーンのことを思って自責の念にかられ、第二に、父のビジネス不振を言訳にして、トムのプロポーズを断わる。この拒絶は、ベネロピ自身、秘かにトムのことを思いつづけていたので、一層ロマンティックな行為として美化されてみえる。ここでラバム夫妻は、急いでシューアルに相談する。

コーリー夫妻の方は、息子のトムの結婚相手としてのベネロピに、かなりの不満を示す。この不満は、ベネロピ自身に向けられる以上に、コーリー家にふさわしくない家として、ラバム家に向けられている。

この間に、ベネロピとトムとアイリーンという三角関係が、実のところアイリーンの誤解、即ち Stanton からの送りもの—— newspaper with an

account of his ranch in it——を、トム・コーリーからのものであると、早合点したアイリーンの誤解に基いていたことが示される⁽¹⁷⁾。

シュアールの助言の後、結局トムとペネロピは、結婚というハッピー・エンドに辿りつく。

以上は、作品「The Rise of Silas Lapham」の梗概である。

V

上に述べたように、この作品のプロットとして、サイラス・ラバムをめぐるビジネスのサークルと、ペネロピとトムをめぐる愛のサークルが考えられる。しかし私はここで、もう一つサークルを認めたい。それはラバム家とコーリー家、いわゆる“Brahmins and nouveaux riches”とのインパクトであり、その喜劇的な緊張関係に、一種の comedy of manners の姿を読みとって、私はそれを第三のサークルと呼びたい。

もちろん、これはプロットと云うことはできないし、従来の批評が主題追求に忙しく、兎角素通りにしてきた一点であるが、私はこれを無視することはできないと思う。

27章に分れるこの作品の構成をみてみよう。

第1章から第10章までは、序論的部分である。全体的な状況が設定され、上述の三つのサークルが萌芽の状態であらわれ、お互いに均衡を保っている部分である。しかし第11章以後、この三つのサークルは個別化されて有機的な関係を失い、分断されるような傾向を帯びる。具体的にこのことをみてみよう。

第11章から第15章までは、第一のサークルであるビジネスの世界も、第二のサークルである愛の世界も、殆んど進展を示さないで前面から姿をひそめ、あの第三のサークルが描かれる。ディナー・インビテーションをめぐる、ラバム夫妻の狼狽振りが喜劇風に示され、トム・コーリーは、コーリー家とラバム家とのコントラストに強く打たれ、ひとり感慨に耽る。そしてこの comedy of manners 風の世界は、コーリー家の晩さん会におけるコミカル・シチュエー

ションにおいて、その頂点に達する⁽¹⁸⁾。この狼狽振りを、実際の引用から聞いてみよう。つぎは、ラバムの妻パーススについての引用である。

Mrs. Corey had said 'Dear Mrs. Lapham,' but Mrs. Lapham had her doubts whether it would not be a servile imitation to say 'Dear Mrs. Corey' in return...⁽¹⁹⁾

'...I don't know what I'm going to wear; or the girls either. I do wonder—I've heard that people go to dinner in low-necks. Do you suppose it's the custom?'⁽²⁰⁾

'...I don't know what we're going to talk about to those people when we get there. We haven't got anything in common with them...'⁽²¹⁾

コーリー家招待の晩さん会の後、トムに向って云うラバムのつぎの言葉は、示唆的である。

'I was the only one that wasn't a gentleman there!' lamented Lapham. 'I disgraced you! I disgraced my family! I mortified your father before his friends!' His head dropped. 'I showed that I wasn't fit to go with you. I'm not fit for any decent place. What did I say? What did I do?' he asked, suddenly lifting his head and confronting Corey.⁽²²⁾

ここから、あの晩さん会におけるラバムのコミカルな失敗と、その醜態振りが、ありありと浮かびあがってくる。

第14章を頂点として、第11章から第15章までは、第三のサークルが作品の実体を掩い尽くして、この間、第一のサークルも第二のサークルも、ストップに近い状態にとどまっている。

ついで、トム・コーリーが、ペネロピ・ラバムにプロポーズするところを鋭角として、第16章から第20章までの間は、主としてトムとペネロピとの愛の問題が取扱われ、その周囲への影響——アイリーンのショック、ラバム夫妻の驚き、コーリー夫妻の不満——が描かれている。

第21章から第27章に至る最終の部分においては、サイラスをめぐって、ビジネスの世界が重点的に描き上げられ、ここに至って、再びロジャーズの姿がク

ローズアップされてくる。そしてサイラスにおけるビジネスと倫理の問題が、一気に描かれていく。この間、トムとペネロピをめぐる愛の問題は、殆んど等閑視されている。

以上の論点を、図式的に整理すると、つぎのようになる。

- 第一部（第1章—第10章）
=序論的部分=
- 第二部（第11章—第15章）
=第三のサークル= (comedy of manners)
- 第三部（第16章—第20章）
=第二のサークル= (love)
- 第四部（第21章—第27章）
=第一のサークル= (business)

メイン・プロットと考えられる第一のサークルと、サブ・プロットと考えられる第二のサークルとが、殆んど羅列的個別的に描かれ、構成上ダイナミックな関係を失っている事実——この事実から、この作品が持つ全体的印象と効果とが、感動の稀薄と不鮮明さを呼び起してくる。それ故、たとえば、部分的にみた場合、ペネロピが父のビジネスの不振をあげて、自分だけが幸福をつかむことはできないと、トムに向って云うとき、第一のサークルと第二のサークルとの、オーガニックな接点生まれかけるが、この場合も、シェアルの助言の強さの前に、その接点は壊されてしまっている。

このような構成上の不統一は、小説美学からみて、作品にとってマイナスである。しかしこの構成上のマイナスは、ハウエルズのリアリズムに起因していると考えられる。逆に、彼の構成をあまり重んじないリアリズム観の、具体例の一つが、ここにあらわれていると云うことができるだろう。われわれは、ここにおいて、再びハウエルズのリアリズムにおける問題、文学における事実性と虚構性の問題に対するあいまいさを、想起せざるをえない。

VI

上述の構成の問題と関聯させながら、つぎに、各々のサークルにおける問題を、掘り起してみよう。これは結局のところ、作品の構成という網の目のなかで、登場人物が保ちうるリアリティの問題である。

まずサブ・プロットをささえている人物、ベネロピを考えてみよう。序論的部分である第一部において、トムのラバム家の訪問から、ベネロピートムーアイリーンの関係が発生する。やがて第三部において、第二のサークルは進展をみせ、トムはベネロピに愛を打明ける。このときベネロピは、一応これを拒絶する。しかしこれを知ったラバム夫妻は、驚いてシューアルのところに相談に走る。ここで、このサブ・プロットはカットされてしまい、われわれは長らくの間、サスペンディドな状態におかれ、待ちぼうけをくわされる。その間われわれは、サイラスをめぐるビジネスの世界の前におかれ、その緊張感がしづまるとともに、ようやくトムとベネロピとの結婚を知らされる。このときわれわれは、一応拒絶した筈のベネロピが、何故結婚するに至ったかにとまどわされる。結局このベネロピの心の変化のプロセスが、リアルに描きあげられていないことは、構成上の問題におちつくだらう。しかしこのマイナスを、ハウエルズは、シューアルの忠告によって埋め合わせている。しかしわれわれは、シューアルの一片の忠告という平板な説明だけにたよって、ベネロピの心的プロセスに、リアリティを感ずることは不可能である。

つぎに、メイン・プロットをみてみよう。冒頭に登場する世俗的で自尊心のつよいサイラス・ラバムと、作品の終りにあらわれるサイラスとは、全くかけ離れたイメージである。しかもこの違和感には、その間に経過した筈の時間の重さがない。サイラスをめぐるビジネスの世界にあって、象徴的な人物ロジャーズは、ラバム夫妻の間の話題にのぼるが、前面にあらわれて来ない。そして第21章に至って、ようやく明確な姿であらわれる。ビジネスをめぐる、ラバムとロジャーズとの間に、緊張関係が起る。高揚した対話の場面やサイラスの苦

悶の場面が描かれ、ここに、ハウエルズが作品の主題を、一気に追い込もうとしていることが解る。しかし第20章に至る迄、このプロットを発展させるようなダイナミックな場面がなく、従ってサイラスは、冒頭に示されたような、ひどく日常的常識的なイメージを持ちつつけている。それ故、倫理的な主題への性急な追求とうらはらに、これまでの平凡なビジネスマンとしてのサイラスのイメージが、性急に消えようとしめない。もちろんサイラスの性格描写については、これまで対話や些細な事柄をとおして行われているが、この問題——倫理とビジネス——をめぐってのサイラスの行動や考え方に、十分な進展がみられない。このように、構成上の問題から生まれたプロットの弛緩と不確かさは、このメイン・プロットにおいて、サイラスの新しい変身を、リアルに肉付けすることができなかつたのである。

以上のように、メイン・プロットにおいても、サブ・プロットにおいても、構成上の問題から、説明的な平板さにおちいり、プロット本来の緊張した展開を示すに至っていない。しかしこのことは、ハウエルズのリアリズムにおいて、プロットがどのような位置におかれていたかということをも、物語っていると考えられる。

第三のサークルは、プロットではないが、この作品に対して抱く、われわれの全体的印象は、このサークルが、単なる背景以上のものとして、迫ってくることを否定し難い。直接的には、このコーリー家とラバム家との対比は、第11章から第15章の間に、つよく描き出されているが、第一のサークルや第二のサークルのように、プロットがストップしてしまうということなく、作品全体に亘って、虚像的な軸として、作品の平板さを救い、時として主題のみ込み、主題を奪うほどの錯覚を与える。しかし、これは純粹のプロットではなく、一種の *comedy of manners* のアスペクトである故、却ってハウエルズの筆づかいは、のびのびとして自由である。“to be true to life”の立場から、つくりものでない、このような世界をリアルに描きうることは、ハウエルズにとって、寧ろ当然であったかもしれない。以上のことは、ハウエルズのリアリズムの特

長の一つ、即ちプロットに弱いというよりか、プロットをつくりものとして、否定しようとする傾向を、示していると考えられる。

この第三のサークルは、作品において、劇的シチュエーションを生み出さない。その理由の第一は、アメリカの社会が、厳密に云って、階級的貴族的の社会でなく、基本的には、デモクラシーの社会であって、階級的対立がないこと、その第二は、対象を忠実に取扱って描くというハウエルズのリアリズム観である。それ故、コーリー家とラバム家との対比を描く場合、その対立も、階級的対立という絶対的なものでなく、相対的なものとして描くことがリアルな方法であり、ハウエルズにあっては、せいぜい、それを喜劇的に取扱う以上のことを、求めることはできなかったのである。

この第三のサークルは、プロットと云われえない以上、これをささえている人物はない筈である。その狼狽振りからみて、一応ラバム夫妻が考えられるが、これらの人物は断片的であって、プロットをささえる論理的発展性を持たないで、一面的様態的である。

しかし今、“Brahmins and nouveaux riches” に力点をおいてみると、サイラス・ラバムとペネロピという主役的存在の間から、トム・コーリーが、浮かび上がってくることを打消しえない。何故なら、トムは、第一のサークルと、第二のサークルと、第三のサークルとの、接点に立っている人物であるからである。このことを、具体的にみてみよう。トムは一方で、品のよくない好ましくないと考える両親に逆らって、ラバムのペンキ事業に飛び込む。他方彼は、コーリー家に似つかわしくないラバム家の娘という理由で、反対する両親に逆らって、いわゆる成り上り者の娘、ペネロピと結婚する。妹アイリーンのことを思って躊躇するペネロピに向って云うつぎの言葉は、シェーアルの助言を想い起させる点において、示唆的な発言であるが、アメリカの青年らしい現実的なイメージを与える。

‘... You can't make her happy by making yourself unhappy.’⁽²³⁾

さらにもう一つ、つぎの言葉からは、トムのデモクラティックなイメージが、躍

如としてうかがわれる。

‘Then why shouldn’t I think all the more of you on account of your father’s loss? You didn’t suppose I cared for you because he was prosperous?’⁽²⁴⁾

ここにおいて、主人公サイラス・ラパムのほかに、作品のなかから、トム・コーリーのイメージが、おどり出してくることがわかった。もちろんこの作品において、第三のサークルは、劇的シチュエーションをつくり出す必然性を持ちえない故に、トムは、ドラマ的人物にまで発展しない。それ故上述の、「両親に逆らって」は、「両親をやすやす無視して」と言い直した方が、より正確であるとも考えられる。それにも拘らず、従来倫理的主題の追求のために、兎角ネグレクトされて来た構成上の観点から、トム・コーリーという青年が強く浮かび上がってきたことは、重要な意味を持っている。

その理由は、三つのサークルを結びつける自由と相対感覚から、デモクラシーのイメージを身につけた、このトムという人物の創造は、ハウエルズのリアリズムにとって、無縁の落し子ではないからである。

VII

この作品の中心的主題、即ち倫理的主題を追ってみよう。ここでは、美学的問題は論外とする。

最初に、サブ・プロットにおけるペネロピを考えてみよう。既にふれたように、ペネロピの結婚への心の変化は、結局のところ、ジュエールの助言によって行われた。今ジュエールの、助言の言葉を聞こう。ラパム夫妻に向って云う場面である。

‘Of course! But in such a case we somehow think it must be wrong to use our common-sense. I don’t know where this false ideal comes from, unless it comes from the novels that befool and debauch almost every intelligence in some degree. It certainly doesn’t come from Christianity, which instantly repudiates it when confronted with it.

Your daughter believes, in spite of her common-sense, that she ought to make herself and the man who loves her unhappy, in order to assure the lifelong wretchedness of her sister, whom he doesn't love, simply because her sister saw him and fancied him first! And I'm sorry to say that ninety-nine young people out of a hundred—oh, nine hundred and ninety-nine out of a thousand!—would consider that noble and beautiful and heroic; whereas you know at the bottom of your hearts that it would be foolish and cruel and revolting. You know what marriage is!⁽²⁵⁾

このところで、シューアルは、妹アイリーンと比較して、より理智的である筈のペネロピが、妹のことを考えて、自己犠牲的な美化や、メロドラマ的幻想に陥ることの愚を突いている。このプロットと、ペネロピの取扱い方をめぐって、第一に、ハウエルズの反センチメンタリズム、反ローマン主義が示されるとともに、第二に、これが、倫理的な問題にまで高められていることがわかる。何故なら、ペネロピが、自己犠牲的な行動を貫くならば、その結果は、ペネロピだけでなく、アイリーンも、トムも、さらに親達をも、不幸におとし入れてしまうことが、暗示されているからである。そしてハウエルズのスポークスマンの存在である、シューアルの現実的合理的見解は、より多くの人達の平等な幸福を求めるという点において、デモクラシーの精神に近い。今、芸術的完成度を抜きにして、このサブ・プロットをとおして、われわれはハウエルズのリアリズムの実体の一つに、触れることができたと考えられる。

つぎに、メイン・プロットをみてみよう。

カーターは、この作品の題名のなかの一語“Rise”にふれて、主人公サイラスが、最後に経済的破綻に立ち至った事実と較べ合わせて、多くの人達が、この“Rise”という言葉の真意を汲みかねて、とまどったことを指摘しているが⁽²⁶⁾、われわれは、たしかに、この題名にこめられた作者のアイロニイを、第一に読みとるべきであろう。

主人公サイラス・ラバムは、三つの誘惑をしりぞけて、敢えて経済的破滅の方を選ぶ。そして第27章の終結のところで、後悔しているかと問うシューアル

に向って、しずかな口調でサイラスは、つぎの言葉をつぶやく。

‘Seems sometimes as if it was a hole opened for me, and I crept out of it’⁽²⁷⁾

このとき、サイラスの心の充実感は、カーターのいわゆる “inner peace”⁽²⁸⁾ であろう。そしてこの経済的破綻を選択する行為は、サブ・プロットにおける、ペネロピの反ローマン主義的变化にならって、反ローマン主義的な行為だとは云えない。この場合、この選択は、現実的な次元においてではなく、精神の問題として、提出されてきている。即ちこれは、自己の心に対する honesty, truthfulness を問いかけているのである。ここに Donald Heiney の云う “Protestant puritanism”⁽²⁹⁾ が、あらわれているとみてよいだろう。私がハウエルズのリアリズムを、東部的といったのは、この倫理性の故である。そしてハウエルズは、その時代のニュー・イングランドの、文学的スポークスマンとなったのである。

一方この倫理性とは、truthful treatment of material を目標とするハウエルズのリアリズムの精神が、人間の内面に向けられたときの姿であると考えられる。それ故ハウエルズのリアリズムは、単なる外面的リアリズムにとどまるものではない。

しかしこの倫理は、サイラスにおいて、更に自己の内面の問題、即ち個人的な問題から、社会的次元にまで止揚される。即ち、これは他人をだます、だまさないという心の問題から、他人をだまして他人の幸福を奪う——多くの人達の平等な幸福を、意識的に奪うか否かという、社会的倫理の問題にまでひろげられる。それ故、サイラスの選択行為——経済的破綻と道徳的向上——は、ピューリタンの倫理と、リアリズムの精神を示すと同時に、デモクラティックな精神に、ささえられていたと考えられる。

メイン・プロットをとおして、われわれは、ハウエルズのリアリズムが、方法上の問題だけでなく、精神の問題でもあったことを知る。

VIII

以上、作品「The Rise of Silas Lapham」への考察と分析の結果、つぎのことが認められる。

第一に、この作品は、文学作品として、第一級であると云うことはできない。この評価は、構成上のメカニズムの問題から生ずる。しかもこのことは、プロットや、劇的シチュエーションや、構成的シメトリーを、リアルなものと考えない、ハウエルズのリアリズム観に、基いていると考えられる。ハウエルズのリアリズムの方法論的あいまいさは、この作品においても、事実と虚構という問題を、未解決のまま終らせている。このことがまた、この作品において、comedy of manners 的傾向を示すに至っている。

第二に、この作品の倫理性からみて、ハウエルズのリアリズムが、方法論の問題に終わらないで、精神の問題にかかわっていることがわかる。そしてこのリアリズムは、デモクラシーの表現であると考えられ、作中の主要な人物、とくにトム青年のなかにその実現がみられた。

このように、作品「The Rise of Silas Lapham」は、ハウエルズのリアリズムの功罪を描いた作品であり、またこの作品をとおして、ハウエルズのリアリズムの実体にアプローチできるという点において、ハウエルズの文学において、さらにアメリカン・リアリズムにおいて、無視することのできない作品であると考えられる。

ロマンティズムから、リアリズムへの転換期に際して、truthfulness のために闘った、ハウエルズのリアリズムの精神をみないで、その文学の持つ微温さとあいまいさ、さらにはそのオプティミズムを責めることは、あまりにも苛酷である。このことを、作品「The Rise of Silas Lapham」は、しずかに、われわれに語りかけてくれるようである。

(42. 8. 30.)

註

- (1) Robert E. Spiller, *The Cycle of American Literature* (New York, 1955),

- p. xiv.
- (2) W. D. Howells, *The Rise of Silas Lapham* (Cambridge · Massachusetts, 1928), p. xx.
 - (3) Clara Marburg Kirk and Rudolf Kirk (ed.), *Criticism And Fiction by W. D. Howells* (New York, 1959), pp.9-10.
 - (4) Everett Carter, *Howells and The Age of Realism* (Hamden, 1966), p.62.
 - (5) *Ibid.*
 - (6) Clara Marburg Kirk and Rudolf Kirk, *op. cit.*, p.15.
 - (7) *Ibid.*, p.38.
 - (8) Lars Åhnebrink, *The Beginnings of Naturalism in American Fiction* (Cambridge, 1950), p.132.
 - (9) *Ibid.*, p.135.
 - (10) Donald Pizer, *Realism and Naturalism in Nineteenth-Century American Literature* (Southern Illinois University Press, 1966), p.51.
 - (11) George C. Carrington, Jr., *The Immense Complex Drama, The World and Art of the Howells Novel* (Columbus, 1966), p.79.
 - (12) W. D. Howells, *op. cit.*, p.93.
 - (13) *Ibid.*, p.xv.
 - (14) *Ibid.*, p.49.
 - (15) *Ibid.*, p.327.
 - (16) *Ibid.*, p.228.
 - (17) *Ibid.*, p.264.
 - (18) *Ibid.*, Ch.14.
 - (19) *Ibid.*, p.185.
 - (20) *Ibid.*, p.186.
 - (21) *Ibid.*, p.187.
 - (22) *Ibid.*, p.217.
 - (23) *Ibid.*, p.265.
 - (24) *Ibid.*, p.371.
 - (25) *Ibid.*, p.251.
 - (26) Everett Carter, *op. cit.*, p.165.
 - (27) W. D. Howells, *op. cit.*, p.381.
 - (28) Everett Carter, *op. cit.*, p.165.
 - (29) Donald Heiney, *Recent American Literature* (New York, 1959) p.22.